

育つ心・育てる心

——この頃の子どもをどう導くか——

森 田 宗 一



(1) 育つものごころ

すべて生きるものは育つ心があり、伸びてやまない命の力がある。その命を謙虚に我々が受け取ることが必要です。育児にしても、お百姓さんが麦や稲を育てるにしても、その育つものごころのいのちを知り、育てる心が必要で、生命に対する不遜な育児が、いかに人間育成を誤っているかは、臨床の経験が我々に教えています。育児の技術や方法論も時と場合により、必要ですが、重要なのは育つ心、育てる心なのです。育つ者の心と、育てる者の心が相ふれ合うところに教育があり正しい育児の道があります。

教育の基本である幼児の育て方について、倉橋惣三先生は「育てる心」という名著を残しておられます。私は学生時代、先生にいろ

いろと御指導いただきましたが、三〇年たった今日その本を取り出してみても、やはり新しい力を与えられます。

私はどちらかといえば、問題児を愛し、その奥にある育つものごころを求めて臨床の仕事をしてまいりました。子どもごころの問題について、てくてく歩きのように三〇年ほどの経験を積んでまいりました。このごろやっと野球でいう球が見えるという境地になれたように思います。このごろのおかあ様方は「育児ママ」などと言われるとおり、育児教育に非常に熱心で一生懸命なのですが、うまくいかない、ヒットならず空振り三振というわけです。その原因は、まず育つもの命——子どもという「球」が見えていないからです。そして育てる心——バッテリーである親や教師の「腰が流れている」のです。

倉橋先生はよく真向き、横顔、後姿、ということを申されまし

た。至言だと思いません。人間を正しく育てるには、この三つの姿がうまくとりあわせられ、調和を保っていないてはならない。むしろ大事なものは、横顔、後姿です。日本のおかあ様方はとかく真面目になり過ぎ、真向きになりがちであります。なにげない横顔、子どものことばかりかまっていないときの姿、その横顔と後姿にこそまことの親・保育者の態度があります。その姿のないところに教育がかえって育つものの心をゆがめ、誤ることがあるのです。子どもは忙しい父や母の横顔、人生を生き抜いているうしろ姿、いのる母のうしろ姿、それを落すはずはありません。それが生涯消えることのない父母の映像となるのです。育つものの心を知り、人間のすばらしい生命の前に謙虚である人だけが、人間を育てる仕事を正しく行なえるのです。

(2) 出会いと育児

「出会い」ということを考えてみましょう。人生は出会いの連続であります。赤ちゃんの誕生は人生への最初の出会いです。そして家庭を絶対の環境として子どもは生れこの世と出会います。そして人と人との出会いを繰り返すのが人の一生です。その初めに会おう人が親でしょう。お母さんでしょう。家庭は、子どもが誕生して出会いをした最初の環境であり、親は初めて出会った人です。人生は、出会いに始まり、出会いをくりかえし、やがて「さようなら」「また会いましょう」といってこの世を別れるものです。

子どもの教育はいつから始めるべきか。この問いに対して、よく三才からとか、就学前教育が重要であるとか言われています。ナブレオンは子どもの生れる二〜三〇年前、その母親が生れ育つ時から始めよといい、マカレンコも同じことをいっています。つまり母が大切だ、母の心のつちかわれる時から始まるということですが、誰が言おうと真理は真理、いつの世も変らない人生の事実が教え示していることだと思います。

ケースワークとかカウンセリング専門の方では「面接」といいます。ケースワークは、面接に始まり面接に終ると言われます。ケースワーカーは良き面接者であることが第一の条件です。教師も保母も親もよき面接者であって欲しいと思います。よき面接には知識も経験も必要であります。出会おう相手の心がよく見えわかるということが何より大切です。また、出会いにおけるラポール親和関係が大切です。対象者との出会いの心に一番大切なものがあるのであって、やたらに技術に走ってはいけません。面接の方法として大切なことは「初めの出会いを大切にせよ。そして別れぎわを大切にせよ」ということです。初めの出会い・面接があとまで尾をひくのです。ケースワークで、初めて接する人に対して、「またぞろ同じようなケースがやってきた」と思うなれ心は、すでに育てる心ではないのです。初心忘るべからず、いつも新しい初めの心がなくてはならない。さらに「またあいたいな」「また会いましょう」という気持で別れることが大切であります。

(3) ユーモアということ

ユーモアとは単なる笑いではなく、文化的人間的なものであります。動物も笑うと言われますがそれは人間の笑いと同じではありません。ユーモアではないのです。ユーモアは深い文化につながるものです。自然にも人間にも明暗がある。その明暗をよく余裕を持って見る心、そこにユーモアは育つのです。このユーモアこそ育つものの心を知り、豊かに育て情緒をのばすうえに欠くことのできないものです。

母親が子どもの持ってきたテストを見て、「なんですか、あなたはベケばかりとってきて」というのではあまりにユーモアがないというものです。三つベケでも、一〇の問題なら、七つマルがある。それを認めてやらなければならぬのです。真向にばかりなりすぎ、ベケの数をせめたてたり、兄と比較したりすることは、育てる心が足りないのです。子どものしつけや教育がうまくいかないのは、育つ者の心と、育てる者の心とがびったり合っていないことです。欠点がある、短所があるけれど、必ず他によい所があります。欠点ですら、それを転化することによって長所にもなり得るのです。

ユーモアは家庭生活にも、子どもとの関係にもいかに大切であるかを考えてみたいと思います。

日本人はユーモアに乏しいと言われる。ことに農村などには乏しいと言われます。しかし子どもがすくすく育つところ日常の生活の

中に、ユーモアは見いだされず。誰がそれではユーモアを遊ぶのでしょうか。それは女性的なものであるよりむしろ男性的なものであるといわれます。お父さんはよきユーモア遊ばん者です。そうでなければならぬ。父親のかもしれない。ユーモアは家庭を幅のあるのびのびしたものにします。

しかし母親は、また天性のユーモリストであることがあります。赤んぼうに、「イナイナイバー」をしているところにユーモアが見られます。イナイナイバー、などに見られる何とはなしの母と子の情緒のゆきかいらの中に子どもの情緒は驚くべき成長をします。そのような雰囲気には育たなかった子どもは、知能も情緒面も遅れるということとは明らかです。イナイナイバーの間にかもし出されるふしぎな関係を通して人間は育つのです。そしてやがて子どもも成長し、少年期、青年期になると、自らユーモアを解し、ユーモアに参加できるようになっていなければならないのです。近頃は経済成長すれど精神成長せず、物に恵まれ、レジャーがあまってもかえって心足らず、という傾向が見られます。中学生になっても体は大きい、ユーモアを解するような心が育たず、ちょっとしたことでもすぐ「頭にくる」「トサカにくる」などという幅の狭い子どもが少なくない。ユーモアを解するような心の余裕や幅が育っていないのです。

東北の中学生の作文の中に大へん楽しいものが見つけられました。しばしば子どもはちょっとした生活の中の父母のやりとりなど

の中にもユーモアを見いだしています。(作文略)

まじめとまじめの間、緊張と緊張の間の谷間にホッカリとのぞくユーモア。家庭はまじめであるばかりでなく、ユーモアが欲しいものです。ユーモアのある家庭にこそ初めてユーモアを解せる子どもが育つのです。

私は子どもの時に父が失敗したため、働きながら学ぶため東京に出ました。一高に入った頃しみじみ我をふり返った時に、ここまでこられたのは父母の愛、母の祈り、社会の恩義を身にあまるほどに受けていたことを感じました。父は私たちに何を残したか。人生の失敗ということを示してくれました。失敗したことによって父はあの意味のうしろ姿を示してくれました。また母はよく祈る人でした。祈る母のうしろ姿は、いつまでも消えないイメージでした。母は子どもたちに「イエス」と「ノー」とのはっきり言える人間にならなければならぬことを教えてくれました。父の失敗を見てつく感じた母の実感で私たちへの教訓となったのです。

私は子どもの頃、虚弱児であったが、母は「さずかりものが育たないはずはない」と信じ、私を意識的に鍛えました。そのおかげで私はまともにも育ったといつてよいほどです。育つものの力を信じてくれたからであります。父はこの世では失敗者だったがユーモリストでありました。

多くの人は、父から人生経験とユーモアを、母から真面目さ、お袋という包容性をうけとり学ぶもののようにです。

(4) このごろの子どもとその明暗

一つの世もそうであるが、子どもたちにいつも明暗があることをよく見なければならぬ。

「今の若い者はだめだ」ということは、昔からいつでもいわれていることであります。一つの世のおとも自分の時代より次の時代はよかれと期待をかけるために、今の若い者はだめだ、というふうに言うのでしよう。

しかしそこに警戒しなければならぬことがあります。今の子どもは昔と変わった面がたくさんあります。しかし、人間は人間であり、子どもは子どもである。その本性の変らざるよい面もたくさんあるのです。変っている問題の面、病理現象を見る時も同時に変らざる明るい面も見べきです。

事例を二、三申し上げましょう。

母親の過保護な養育によってA子ちゃん(九才)は、「王女様型神経症」とでも言うべきものでした。全く自己中心的な、他人の気持ちなどほとんどわからない子どもになってしまいました。かつ、自主的な幅のある身ごなしのない、適応能力のない子どもになったわけです。すべて世話をやいていた母親が病気になった時、A子はひどい不安症状を示すようになり、家庭でも学校でも、もてあます子どもになりました。そんなふうになったA子を私の家にひきとって生活を共にすることにしました。

子どもは本来たくましい生命力と適応能力をもったものです。私は家庭を船にたとえます。子どもも、小さいながらに各々には役割があります。家族全員がろを持ってこぐのです。みんなの連帯の役割があるはずです。

A子もやがて我が家の中で、だんだんにその役割に慣れてきました。三か月、半年たつてA子はすっかり元氣になり子どもらしさ子どもとなりました。学校の成績もぐんとよくなりました。特別なことをしてやったのではない、育つ心の適応性を再発見し、我が家という船の中でA子におおいかぶさっていた雲がはらわれたのです。A子はとくべつよくなったのではなく、あたりまえになっただけなのです。本来のA子がよみがえってきたのです。

親、教師、子ども、の問題はどこにあるのか。誰が問題なのか、こういうケースからも教えられるのです。

丹精こめて依頼心の強い子にされた子ども。

「あんたはどうして自分のことぐらゐ自分でできないの」などとブツブツブツ子どもに文句を言いながら、すべて子どものことをききまわりし、またいいなりになる親がよくあります。こういう親は一生懸命丹精こめて依頼心の強い子どもを育てているようなものです。問題の子はその原因から治していかなければなりません。依頼心の強い子どもには、体験を通して、「やればできるんだ」という自信を与えることが大切なことです。そのために子どもが多少もたついても、親はやたらに手を出さずに忍耐力を持って子どもを見守

ってやることです。子どもに経験の機会を与え、その子を見守る気持ちを持たなければならぬのです。

そのほかにも、さまざまな問題の子どもたちがあります。もやし型、雑草型、バーバー型、人工的虚弱児型など。

最近臨牀の場で非常に多いのが過保護児です。もやしのような気はやさしくて力なしといえる氣力と弾力のない子どもです。そういう子どもを幼稚園などでうけとつたら、最初の面接でその子どもがどんな種類の球であるか、どういう育てられ方をしたか、見分けなければなりません。貧しい教育のない家庭でも子どもはよく育ちうるし、教育熱心の上流の家庭にも、同じ根に咲くあだ花のようなゆがみがありうるのです。問題の変化球を見る前に、子どもという直球を見る目を養っていただきたいのです。

親はしよっちゅう子どもに、「それ危い、それころぶ」とハラハラ、イライラと手を貸し口をかけたがります。子どもは土手つぶちを歩いたり、どろんこになって遊びたいのです。そしてその中で、子どもにはさまざまなことへの適応能力が育っていくのです。おとなの誤った愛情によって息切れのする幅の狭い、怪我をしがちな子どもができるのです。

育つ者は自ずと育つ者の適応能力を持っています。「もてあますように育ててもてあまし」という川柳のとおり、育つものの心を知らないものが、もてあますような育て方をしてもてあましているのです。

心の憩いの場を失った子ども。

今日の進学ブームは子どもに家でも学校でも一時の息ぬきの暇をも与えず「勉強、勉強」としりをたたたく。学校と家庭がよってたかつて息切れのする、すぐ頭にカッとする子どもを作り、しまいには臨床の場を繁昌させる結果となるわけです。

恵まれた家庭で発生する非行の事例の中に、「気はやさしくて力なし」の子どもたちを見ます。欲しいものは何でも手に入る、何でも思うとつりになる生活の中で忍耐力、抵抗力、持久力などの身心の力が養われず、自己統制力がとぼしく、身ごなしの訓練のできていない子どもになるのです。子どもが非行におちいった時、親、とくに母親は「うちの子に限ってこんなはずではなかったのに、環境が悪い、友達が悪かった」などと嘆き、幼少の頃からの育成を反省しようとしないう親たちが、少なくありません。もう一度足もとを見てそこから新しく出発しなければなりません。

同じ環境、同じ状況の中で、僕はしない、私はいやだ、というブレーキのきく、ハンドルきりまわしのできる子どもがいるのです。本人の性格、いわば球質とその球筋をよく見て、バットをふらなればばいから一生懸命子どもの非行防止をしようとしても空振り三振ということになります。

家庭での幼児の頃は一回戦、基本的習慣の時期、これも野球にたとえるなら一回戦でしょう。幼稚園の段階は、三回戦のようなもの。この段階で点をとっておけば、後はやりいい。中学生はラッキ

ーセブン。高校生以後は最終回に近いわけです。回数がつまると点をとりにくくなります。少なくとも先取得点をしておけば楽にすめやすいものです。延長戦へなだれ込みも覚悟しなければなりません。早ければ早いほど勝負をきめやすい。即ち、人間形成は早いほど楽なのです。

雑草型の子どものに見られるところの情緒欠如は、丹精こめて情緒とリズムを育てる努力がいりません。

もやし型は情緒はほのぼのあるが、可憐で力がない。陶冶訓練が必要。球をよく見て見分けて扱いは決めればよいのです。

親子関係のベトリ型をどうして離し、子どもを伸ばし、母親に見守らせるかが問題です。子どもより母親の方がむずかしいものです。母親を正しく診断して、正しく扱うのは、ケースワーカーでも一〇年選手でなければむずかしい仕事です。子どもが少しよくなる。と母親はすぐ手をかけ過ぎ、子どもはまた、もとにもどることがあります。ブレーキとハンドルと同時に、いやそれよりさきにアクセルのきく、活力のある子どもにし、身ごなしの訓練を与える必要の子どもが多いのです。そういう結果、活力のある節度ある身ごなし、目のかがやきのあるわが子の様子を見て、初めて育児のやり方が誤っていたことを反省し、さどつてくれる親が少なくないのです。

愛情を知らないで育った子どもの場合、プロウクンホームで、ほつたらかにされ、非行に走ったような場合。彼らは素はだに感じる愛情を欲している。何度も何度も失敗して、少年院を出たり入っ

たりしても、素はだの愛情のある人間関係の中で立ちなおりうる例は少なくありません。「愛はすべてに勝つ」ということを感じさせられます。そこに、育つものの心と育てるものの心のふれ合いがあるのです。

(5) 躰の盲点七色

パーバー型。産みっぱなしの子ども、ほったらかしの子ども。そういう野放しではこまります。

バラバラ型。子どもの躰の方針、子どもへの態度に一貫性が見られないタイプ。昨日と今日、父と母、家庭と学校、全て一貫性がなくバラバラであるのが困るのです。

ガミガミ型。ただガミガミとしかる型。しつげとはやかましく叱ることだと思っっているような親が多いのです。

イライラ型。心理学ママとか教育過剰の親にあります。伸びゆく子どもの心知らずです。親は子どもを見てはイライラハラハラしている。子どもを見守ることのできない親です。

ベトベト型、ホイホイ型。子どもを信じ、子どもの独立心を育てないため、信頼することのできないもやし型の子どもを作る。援軍きたれかし型の子どもとなり、抵抗力のない性格となり、問題をおこし易い。

「真向き、横顔、うしろ姿の三態の適宜な取りあわせにこそ、家庭教育や保育の要諦がある」とは真理です。パー、バラ、ガミ、イ

ラ、オロ、ベトホイ、しつげの盲点七色は、いずれも三つの態度の適宜なりあわせがないからおこるのでしょう。

この頃は親も教師も、しつげ教育のテクニシャンになり過ぎ、しつげの心、育ての心を忘れていくようです。心なくしてテクニクは子どもを傷つけるのです。

(6) しつげや保育の要をどこに置くか

第一は、家庭は人間のふるさとであるということ。

人間がそこで生れ育ち、人間性の培われるふるさとのようなものです。「家庭はわれわれの生命の源であり、考えることを学ぶ最初の学校、祈ることを最初に学ぶ聖堂である」と国際社会綱領の冒頭にあります。そういう意味で、人間のふるさとであります。そしてまた家庭はほっとする場所です。心の憩いの場、傷ついた感情も癒されるところです。ふるさとは離れてこそなつかしいものですが、子どもにとっては安らかな寝ぐらであり、人間性を形成する道場でもあるわけです。

第二は、のびのびとけじめをわすれなくということ。

子どもは伸びゆく生命である。のびのびと幅ひろくまず育てなくてはなりません。しかしやがて人間にも妻踏みの時期が必要です。初めのうちにしっかり躰けることが肝腎です。のびのびということだけに傾くとパーバー型になってしまいます。この養育の要がすなわち躰のかんどころではないでしょうか。人間性のなかには、自然

のままに放任し、伸ばしっぱなしにしておいてはいけないものがたくさんあります。たとえば食欲とか、セックスの問題などそれです。人間はそれらを自分で抑制し、より高次のものに転化していくことが大切です。プレーキをかけなければならぬのです。陶芸訓練が必要です。

第三は、球を見て腰をおちつけること。

子どもにはいろいろのタイプがあります。球質がちがいます。それぞれ個性をよく見ることです。そしていろいろの問題の変化球があります。攻撃型あり逃避型ありというわけです。それぞれを打つかんどころがあるのです。そして子どもは本来直球であることを信ずること、育つものの生命に対する謙遜さと確信がなければ育てることはできないのです。腰が流れおよび腰では、球はうまくうてません。

第四、子どもは子どもであるが小さい社会人でもある。

子どもには子どもの世界があり心理があります。しかし、子どももあつと思う間に大きくなり、一人立ちするようになります。子どもは小さいながらに紳士であり淑女であります。そういう前向きな教育を忘れてはなりません。子どもの欲求に全てあわせる親、勝手なわがままをゆるすことは、子どもを尊重することにならず、誤った子ども中心主義です。

第五、うちの子もよその子も共々ということです。

わが子だけでなく、うちの子もよその子も共々に生かさされてい

る。そういう視野のあるところだけのびのびとしかし節度と社会性のある人間が育つのです。うちの子だけをと考える親からは、息切れし易い、幅のせまい子どもができます。「うちの子もよその子も」ということが合ことばに終ってはならないのです。しつげと保育のかん所、わが子教育の秘訣だと心得るべきです。育児教育とは、何て楽しいことだろうという喜びの実感も、そこから湧いてくるものです。

——これは、三時間にわたる講議の要点だけ記したもので委曲をつくしていません。そこで講師の著書を紹介しておきましょう。

流れは絶えず——生き方愛し方導き方 東洋館

しつげの再発見——少年裁判官と小児科医の眼

日本経済新聞社

(東京家庭裁判所判事、上智大学講師)